

「小児摂食嚥下障害」 ―疾病のある子どもの摂食機能の発達―

様々な疾病のある子どもの摂食嚥下機能の獲得には、健常児に比べて長期間を有します。摂食嚥下障害の原疾患の特徴によって、機能獲得までの期間や形態成長との関連には大きな違いがありますが、発達過程の違いはそれほど影響はないといえます。

1. 機能発達に關与する要因

- ・ 肢体不自由：肢体不自由は、多器官の協調運動を要する随意運動が多い摂食嚥下では、機能発達の遅れや発達が阻害される主要因となります。
- ・ 知的障害：覚えることが苦手な知的障害児の多くに摂食嚥下機能の発達遅延が見られます。これは、捕食や咀嚼などの随意運動が繰り返し学習により獲得されることによるものと考えられています。日常生活の中で学習効果を上げるまでに時間要するため、摂食嚥下機能の獲得にも時間を要することになるのです。
- ・ 神経・筋疾患：筋ジストロフィーやミオパチーのような疾患は、機能発達の阻害要因となるばかりか、小児期においても疾患の進行とともに摂食嚥下機能減退の主因子となっていきます。進行性疾患は、発達と機能減退の要因になります。
- ・ 形態異常：アペルト症候群などの顎・顔面領域の形態異常を伴う疾患では、成長とともに形態異常が顕著になる場合が多く、機能発達にとって大きなマイナス因子となります。形態異常を補うために代償的な動きで機能を営めるような指導対応も必要となります。
- ・ 精神・心理的問題：ADHD、アスペルガー症候群などの発達障がいがある要因となる摂食嚥下障害では、発達障害としての疾患が関わる詳細な要因について今後の研究を待たなければいけません。
- ・ 育児環境：疾患により機能発達が遅延したり停滞したりする子どもに対しては、発達に最適な育児環境により発育を促すことが大切と成りますが、機能発達にとってはマイナスの環境下になってしまうこともあるため注意が必要となります。

小児の基礎疾患や育児環境など様々な要因が重なりあって、発育期にある小児の摂食嚥下障害の原因となっているのです。

2. 機能障害を修飾する因子

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 感覚過敏、鈍麻・ 心理的拒否・ 長期間の経管栄養による依存症・ 薬剤による影響・ 食事介助方法の不敵・ 食物形態の不敵 |
|--|

（表）摂食嚥下障害を修飾する主要因の構成因子
その子どもの摂食嚥下機能にあっていない食形態や介助方法などが障害を修飾している因子となることが多くあります。食べることは日常生活機能の代表的な機能です。間違った・不適切な環境を毎日の生活（育児）で繰り返し行われることで誤学習してしまい、障害を修飾してしまうことになって

しまっていることが多くあります。その子どもにあった機能発育を促すようにしていかなければいけません。

3. 発達期の機能不全症状や異常運動の捉え方

	特徴的な動き	機能不全症状・異常運動
経口摂取準備期	哺乳反射、指しゃぶり、おもちゃなめ、舌突出など	拒食、触覚過敏、摂食拒否、原始反射の残存など
嚥下機能獲得期	下唇の内転、舌尖の固定、舌の蠕動運動での食塊の移送など	むせ、逆嚥下、食塊形成不全、流涎など
捕食機能獲得期	顎・口唇の随意的閉鎖、上唇での取り込み（こすり取り）など	こぼし（口唇からの漏れ）、過開口、舌突出、スプーン噛みなど
押し潰し機能獲得期	口角の水平の動き（左右対称） 舌尖の横口蓋ひだへの押し付けなど	丸飲み（軟性食品）、舌突出、食塊形成不全（唾液との混和不全）など
すり潰し機能獲得期	口角の引き（左右非対称）、頬と口唇の協調運動、顎の偏位など	丸飲み（硬性食品）、口角からの漏れ、処理時の口唇閉鎖不全など

障害のある子どもの摂食時に、口腔領域の運動はあるものの、目的とする機能ができていない場合がよくあります。例えば、咀嚼運動によりすり潰し運動は見られるが、潰された食物を口蓋に押し付けながら食塊を形成するという動きが未熟なために、嚥下時にむせてしまう子供がいます。食塊形成の動きが獲得されているということは、咀嚼して粉碎された食物を嚥下するための前提となります。摂食嚥下というのは、食物を口の中に取り込んで咀嚼し、食塊を形成し嚥下するという一連の流れをいいます。咀嚼運動のような顎の動きをしても、食塊形成ができていなければ咀嚼しているとはいえないのです。食物を口の中で処理して嚥下するまでのそれぞれの機能をきちんと営めるようにならないとダメです。

4. 機能発達と形態成長の時期のズレの影響

摂食嚥下の口腔咽頭部に関わる機能の発達に最適な時期は、口腔咽頭部の成長が著しい乳幼児期と幼児期前半です。疾病のある子どもの多くは、この時期を過ぎてても機能獲得ができていません。疾病のある子どもの多くは、成長して大きくなった口腔で発達が未熟なままの動きがそのままなされるため、異常運動となったり、発達に多くの時間を要したりしてしまいます。

疾病のある子どもに対しては、関与する多くの要因について詳細に評価を行い、その評価を基礎として、指導、リハビリテーションへとつなげていくようにしなければいけません。

